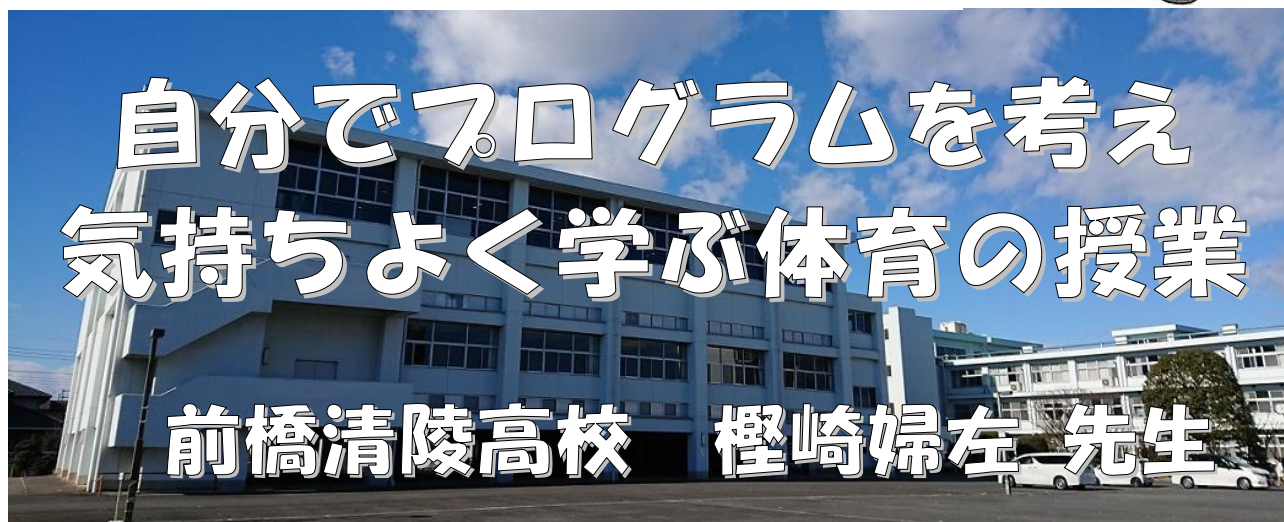


さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



前橋特有の冷たいからっ風が頬を突き刺す1月21日(月)、群馬県立前橋清陵高等学校の体育の授業を見学しました。授業者は榎崎婦左先生、教職歴20年のはつらつとした女性の先生です。

## 前橋清陵高校は単位制高校

前橋清陵高校は、定時制の昼間部、夜間部そして通信制の三部から成る単位制高校です。学年の枠がなく留年がありません。決められた単位数を取得すれば卒業となります。3年間で卒業できますが、4年間在籍する生徒もいるし、最大6年間在籍することもできます。単位制ということで、自分の生活や学習状況に合わせて適切な科目を選択します。多くの学校は、時間割が固定され、月曜日の1限目は数学、2限目は国語、3限目は体育のようになっており、クラス全員がその授業を受けますが、清陵高校では生徒が自分で時間割をつくります。例えば月曜日の1～2限目は、現代文A、現代社会、数学I精選、数学II、体育、書道など都合10科目の中から1科目を選びます。同様にして3～4限目、5～6限目もそれぞれ1科目選びます。このようにして1日3科目を学習します。2学期制をとっているため、前期と後期で選択する科目も変わります。入学早々の生徒は教室の移

動に戸惑うようですが、すぐ慣れると言います。更に、学期毎の入学・卒業が可能であることも大きな特徴です。

## 何人出席するかわからない！

この日の授業は5～6限目で、冷え冷えする体育館へ向かいました。13時5分から授業は始まりますが、すでに榎崎先生はしっかりと防寒着を着用し授業準備に入っていました。先生に「生徒は何人参加するのですか」と聞きました。「何人来るか分かりません。出たとこ勝負ですから」と答えてくれましたが、その意味は徐々に分かってきました。

## 5限目は「体づくり運動」

5限目の授業の単元名は「体づくり運動」です。多くの読者が高校時代に経験した体育の授業は、全員でバスケットボールやバレーボールをしたのではないのでしょうか。榎崎先生の授業はそのイメージが大きく変わります。体育館に集まってきた生徒は半紙ほどの大きさのホワイトボードを手にし、

床に置かれた小さなマグネットカードを取りボードに貼り付けていきます。小さなマグネットカードは9種類あり、ストレッチ、脈拍数、走(歩)、体幹、筋トレ、縄跳び、リズム、ラダー、フラフープの文字が書かれています。生徒はこの9種類の中からこの時間にやるべき課題となるカードを何枚か選び、ボードに貼り付けていました。



## まず最初に脈拍測定

「さー始めるよー」榎崎先生の声が体育館に響きます。「脈を測ります」と言うと生徒は手首を押さえ、脈を測り始めました。「ホワイトボードに本日の授業の目標を書いて下さい。一つの種目は5～6分とまかせますが、1種目15分とかにはしなない。トータルで25分ほどになるように組み立てて下さい。それでは始めて下さい。」生徒が持つホワイトボードには自分の体力の課題となる目標(例えば持久力とか筋力アップなど)が書かれ、貼られた小さなマグネットカードの脇には3や5の数字が書かれています。一つの種目にかける時間(分)を示しています。生徒には100円ショップで用意したというキッチンタイマーが配られています。ストレッチを5分、筋トレを5分、フラフープを5分というようにキッチンタイマーで計りながら次の種目に移ります。単独で行う生徒、二人一組になって同じメニューを行う生徒、三人一組の生



生徒一人ひとりがこの時間に取り組む種目のカードを選んでいく



走



ストレッチ



フラフープ



筋トレ

徒たちもいます。行う種目もそれぞれが違うので、走ることから始める人、ストレッチから始める人と様々です。

## 授業登録者39人、出席19人

檜崎先生によると特にグループを作ることとは指示していないと言います。清陵高校に通う生徒の事情を配慮した上でのやり方ようです。生徒のなかには過去に不登校を経験している生徒も多く、生徒同士の関係構築が苦手な生徒もいるとのことでした。生徒たちが抱える状況は出席数にも表れているようです。体育の授業に登録をしている生徒は39人ですが、この日の授業出席者は19人で、大半はすでに欠席数がオーバーしていると言います。学年の枠がないので19人のなかには3年生も4年生もいます。単独で行っている女子生徒は「自分に合ったペースでできるから」と述べ、二人一組で行っている女子生徒は「二人で組むとお互いに手抜きできないから」と言います。生徒たちはそれぞれが目標を持ち、

誰かに合わせなくてはならないというのではなく、自分の意思で動こうという姿勢が感じられます。

## 6限目は「選択制体育」

6限目は「選択制体育」で、それぞれが好きなスポーツを選びます。バドミントンに男子5人、バスケットボールは女子4人が2人の組を作って別々にやっています。卓球は女子2人、ヨガに取り組み女子2人はDVDを見ながら黙々とやっています。縄跳びは女子1人、スポンジ製の柔らかいボールをテニスのように打ち合うスポレックは男女1組と単独で行う女子2人がいます。ここでも5限目の授業と同様に種目を1～2種目にまとめたり、同一種目を一緒にやらなくてはならないことはしていません。やりたい種目をやりたいようにやるということが授業の方針のようです。



卓球

ヨガ



縄跳び



バドミントン



スポレック

## 檜崎先生にインタビュー

授業見学が一段落したところで、檜崎先生の授業方針などをお聞きしました。

**記者:**このような授業をするようにしたのは何故か。

**檜崎:**90分授業だが、90分同じ種目をやるのは大学生でも大変です。最初の10分15分はやっても後は座っているような状態でした。それを改善したいと思いました。彼らの今までの学習や生活の環境等を

考えると、彼らがやりたいことをやらせる、将来彼らが運動をできるようにするために、スローな競技性の低いものを経験させておきたいと思いました。5限目に行った25分間は多いかもしれないが、これくらいの時間は出来ると言うことを習得してもらいたいと思っています。

**記者：こうした授業はいつから始めたのか。**

**榎崎：**清陵に赴任して6年目になりますが、最初の年は前任者の流れもあるので、2年目から改善、改革を行ってきました。生徒たちは経済的には決して恵まれているほうではなく、スポーツジムに通うような家庭環境ではありませんので、どこでも簡単に出来るようなものにラインナップしました。

**記者：体育という科目に対する生徒の反応は。**

**榎崎：**中学時の体育が嫌いだったと言う生徒が約7割です。理由はできなかったからです。できる子のための体育だったと感じているようです。今日の授業は1年生が主体の授業でしたが、2・3年生主体の授業になると、ホワイトボードに種目を書いたマグネットカードを貼ることはなく、自分でやることは分かっているので、直接プログラムを書いています。

**記者：個別的な技術指導はしないのか。**

**榎崎：**生徒たちは授業の終わりに「振り返り」の感想を書くようにしていますが、私は技術指導の代わりにそこにコメントを書くようにしています。基本的にはどうやったら技術が高められるかは自分で考えさせたいと思っています。私からはそのきっかけとなるコメントを書くことだけです。もちろん授業中にも声をかけるようにしています。

**記者：先生からのコメントに対して生徒はどのようにして技術を高めようとしているのか。**

**榎崎：**スポーツの本で調べることや、家に帰って調べることもあります。場合によってはその場でスマホを使って調べる生徒も

います。スマホを授業で使う時は申し出るようにしています。

**記者：体育の教師としての思いは何か。**

**榎崎：**生徒に正直でありたいと思います。生徒には健康で幸せでいて欲しいと思います。

## どの子どもできるようにしたい

多くの学校は、一つの教室で40人ほどの生徒が同じ科目を一斉に学んでいます。清陵高校も学年とクラス編成（クラス担任は置いている）はありますが、授業を選択する時の学年の枠がないために、一つの授業の中に1年生もいれば2年生も4年生もいます。授業への出席も全員が顔を揃えるとは限らず、授業の進度を揃えて行うことの難しさを感じます。

榎崎先生の授業は、こうした生徒の状況を的確に掴み、生徒がすすんで行う授業の展開に持って行ったことにあります。何よりも体育という科目を好きになって欲しい、そのためにはやれることをやれる範囲で無理なく進めるという方法に行き着いたのだと思います。

中曽根康弘首相の時の臨時教育審議会（臨教審）は、強力に教育の複線化をすすめました。以来、教育の格差はすすみ、故三浦朱門氏が教育課程審議会会長の時に、氏は「できん者はできんままで結構。戦後50年、落ちこぼれの底辺を上げることにばかり注いできた労力を、できる者を限りなく伸ばすことに振り向ける。限りなくできない非才、無才には、せめて実直な精神だけを養っておいてもらいたい」と言い放ちました。こうした考えが今も根強くあり、教育現場にひずみが生じていると言えます。

どの子ども出来るようになりたい、分かるようになりたいという願望を持っています。こうした子たちにどのような方法で授業を進めていくのか、榎崎先生の実践は大きな示唆を与えたと思いました。

《文責：須田章七郎》

## 卒業後の将来、生活の中で続けられるようなオリジナルメニューを

体育の授業で忘れられない思い出がある。小学校の鉄棒の授業、2列に並んだ私たちは先生の合図で鉄棒に駆け寄った。私は思い切り足を蹴るが、なかなか逆上がりができない。隣の列はスイスイ進むのに私の列の子たちはおいて行かれる。跳び箱も同じ。この情景は未だにトラウマになっている。

今回の榎崎先生の体育の授業で、生徒の言葉に希望が見えた。「こういう体育の授業は、好きです。これまでは体育は苦手できらいだったけど。ここでは、自分で考えてやれるから…楽しい。」

体育の授業は、決められた種目を、先生の号令に従い練習していくスタイルだとばかり思っていたが、榎崎先生のようなスタイルと実践があるなんて、思いもよらなかった。

榎崎先生は、前橋清陵高校の生徒と出会い、彼らの現実に直面して、これまでの授業を思い切って変えた。さらに先生のまなざしは、生徒の卒業後、将来を見すえている。「将来、生涯スポーツとして運動できるように。ジムにお金を出して通わなくても、運動器具が無くても、自分で生活の中で続けられるようなオリジナルメニューを」と。

40代で大病し疲労困憊してフルタイム勤務を退職した私の体はボロボロで体力は最低に落ち込んでいた。働いている最中は、自分の体力づくりや運動なんて、考える余裕も知恵もなかった。今70代の私は、仲間をつくり体力づくりのメニューを相談して楽しく続けられるようになって、榎崎先生の提案の意義が心底納得できるのだ。

《文責：瀧口典子》

### 【榎崎先生に寄稿していただきました】 彼らの将来が少しでも健康で幸せであることを願って

清陵高校教諭 榎崎婦左

「授業」に関して深く考え始めたのは、前任校の特別支援学校（知的障害・高等部）での経験からです。特別支援教育は研究や研修が校外で多くあり、いかに「個々の生徒の学びを支えるか」に授業準備時間を費やしました。ここで学んだことは『できない子ではなく、できない状況にある子』という、生徒にベクトルを向けるのではなく、その学習状況を整える教師側にベクトルを向けるものでした。また学習環境を考え整えても、うまくいかない事は多々ありました。その時はめげずに改善策を考え、再チャレンジを繰り返しました。この経験が、現在の授業に



取り組む基本的な姿勢の軸となっています。生徒に正直に接することで、今の自分や学習状況に足りない部分が見え、独りよがりにならずに次へ進めます。高校体育では「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」ことを目標としています。目の前にいる生徒の将来を見通し、「今、何を習得したら、彼らの将来が少しでも健康で幸せに向かえるだろうか」と考え、この授業形態に辿り着きました。体育が苦手（嫌い）だった生徒でも、やらされるのではなく自分の身体（状態）を知り、自分に合った運動を自ら考え運動できるようになることで、この授業経験が、将来の健康を支えるスポーツライフの礎になることを願っています。